

ムラサキツメクサ

國 兼 治 徳

大東亜戦争 私達の年齢では第二次大戦と云うよりなじみがある一がはげしくなって来た頃、田舎の小学校の夏休みには、ムラサキツメクサの種子を集めることが宿題になった。その頃はムラサキツメクサと云う名称ではなく、単にクローバーと呼んでいた。この種子は軍馬の飼料になる牧草をつくるためと聴かされていたが、集めた種子がどこに運ばれて栽培されたか不明である。とにかく、暑い夏でないと乾燥した種子はない。私は夏休みを祖母の許でいつも過ごしていたから、クローバー集めも祖母の家近くで行なった。祖母の家ではいつも遊びに夢中になっていたので、父の家に戻る数日前に祖母やすぐ上の姉に手伝ってもらった。祖母の家は滝川の空知川に近い所にあったから、種子集めは主に空知川の川岸や中州で行なわれた。戦時中の空知川は今のように向う岸がまる見えの状態ではなく、川岸には森の如く鬱蒼とした河原林が茂り、川の音と共に小鳥の囀る声がきけた。そして、川に平行して小路があり、クローバーが点々と生えていた。炎天下で祖母と一緒にクローバーの種子を採っては袋につめたが、布袋を一杯にするのは仲々骨の折れる作業だった。私はすぐいや気がさし、祖母に叱られながら採った記憶がある。祖母のきまり文句は、「採らないと父さんに叱られる」の一点ばりで、又、私にはその一言が一番きいたのである。

私は生後5ヶ月で生みの母に死別し、その後は祖母に育てられたが、小学校入学時から父の許に引きとられ、それからと云うものは父の強い面ばかりを見て育ち、父に甘えた感情を持った経験は一度もない。父はその頃小学校の校長をしていたが、常に厳しく近よりがたい存在であった。その父がお墓参りの時だけ、雰囲気が違うように感じられた。墓参は私の小学校・中学校時代を通じ、いつも祖母と父と姉と私だけで、父の家には今の母や弟達がいたが一緒にお参りをした記憶はない。只、私が高校生になって父一家が祖母の家と一緒に住むようになってからは、母も弟達も一緒に墓

参りをするようになった。孝えてみると墓にほうむられているのは私の母であり、祖父であり、兄達である。従って小学校時代は親子水入らずの墓参であった。墓前の父は急にやさしくなったような気がする。父はいつも自らお経をあげた。坊さんでない父の読経をそばを通る人は必ずじろじろと観察していくが、父は意にかえさない風であった。父はどんな気持でお参りしていたのであろう。私は父から母のことを聞いたことがない。私も母について質問をしたことが一度もなかった。それは父と子が共に感じている今の母へのエチケットで、暗黙のうちに心得ていたのであろう。父は酒に酔うとよく「美しき天然」という歌を唄った。「空に囀る鳥の声……」にはじまる歌詞は哀調があり、父の歌は決してうまいとは云えないが、酔いにまかせて唄う姿が印象的だった。ある時、姉から「美しき天然」は死んだ母の愛唱歌だったと聞いた。それは強い父が人しれず見せた母への慕情であったのかも知れない。

クローバーの和名がムラサキツメクサ(又はアカツメクサ)であると正式に知ったのは、私が教師になってからのことである。ヨーロッパ原産の多年生草本で、明治維新の頃、牧野新日本図鑑には1868年前後日本に入って来たと記載されている。しかし、朝日百科の「世界の植物」には日本へは江戸時代に伝来し、牧草として北海道へ導入されたのは明治初年とされている。いずれにしても江戸時代以降に帰化した植物であることは間違いない。

ちなみに家内に聞いたら、戦時中に採集したのはクローバーでなくチモシー(オオアワガエリ)の種子だったと云う。家内は道東に育ったのだが、地域により集めた牧草の種子に違いがあることを初めて知った。どのようにして牧草の種子をきめたのか不明だが、このようなことでも調査をすると面白いかも知れない。父は4年前に亡くなり如何ともしがたいが、もっと父に近づいてその辺の事情を聞いておくべきであった。